

# 主体的に学び、獲得した力を発揮することができる体育学習の創造

～「仲間と高め合える授業を目指して」～（2年次）

長沼 裕樹      野沢 克美      田形 麻巳子

## 1 研究主題設定の理由

### （1）これまでの研究から

これまで本校の保健体育科では、平成23年度から平成25年度まで「自ら問う力を育む授業の創造」を目標に研究を進めてきた。これは、体育学習において全ての生徒が身に付けるべき「思考力」・「判断力」・「表現力」の内容を明確にし、どのように整理すべきかを目指した研究であり、学習指導要領改訂の要点と合致していた。特に、各単元において、どの場面で生徒が「問い」を強く意識して取り組むのか、またその「問い」を生徒自らが主体的に考えるための指導には、どのような方法が有効かを探ってきた。その結果、教材・教具の工夫や応用的・発展的な練習を効果的に取り入れることによって「問い」を強く意識し、課題解決に向けて取り組むことがわかり、それらを意図的・計画的に授業へ取り入れた。

平成26年度からの3年間は、『「深く考える」授業の創造』と全体研究主題が設定された。保健体育科では、授業の中に「考える」場面を多く設定することは難しいと感じていた。これは生徒同士の話し合いやアドバイスを交換する時間を多くとることで「考える」ことは可能であるが、運動量が減少してしまうという問題が出てくると考えたからである。体育学習では個人で活動する場合のほかに、ペアでの補助や教え合い、ICTの活用を含めグループで協働的に学習することも多い。その際、教え合った内容や他者の意見を、個人カードやグループノートに書かせ、自己表出の方法を工夫しながら自分たちの考えを発表するといった活動を実施し、「思考力」・「判断力」・「表現力」等の育成を図り、自分が「理解していること」や「できること」を他者に伝えたり、表現したりすることが「わかる⇔できる」につながる要因と考えた。これを実現するためには、生徒個人が課題に対する自己の見解をもち(Plan)、それを示し合ったり、表現したりすること(Do)によって共有・共感、吟味し(Check)、新たな認識の高みに至る(Action)という過程が大切になってくる。この「共有・共感、吟味」が、授業の中で数多く見られ、互いに高め合うことができるよう「問い」をもたせ、活動しながらも「考え続ける」場面を設定することで練習する(運動量の確保)ことと振り返り(「深く考える」)を効率よく設定することに重点をおいた。

研究の成果として、授業で生徒に提示する「めあて」を工夫し、課題に対して一つの答えを目指すだけでなく、答えにつながるヒントやいくつもある答えの中のどれかを見付けることができるような投げかけをしたり、全体でそれぞれの考え方を共有する場面を継続的に設定したりすることで、吟味(Check)し思考を働かせる(Action)生徒の姿を見ることができるようになった。既習事項から考え出された解決方法が最善であるのかどうかを検討するために仲間と協力してもらったり、表現して伝えたり、意見交流をしたりして、より良い解決方法を仲間と協働的に探ろうとする姿勢や学習方法が身に付いてきたこと、さらに、自分自身の考え方だけで完結するのではなく、自分自身の考え方が正しいのか、それとも他に何か良い方法があるのかと思考錯誤する生徒の姿は、これまで保健体育科が「自ら考え、主体的に取り組む体育学習」について研究してきた成果であり、視点が変わる見方からの課題に対するアプローチによって生徒は「深く考える」状態となって学習に取り組んでいたといえる。

平成29年度からの3年間は、「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成」と全体研究主題が設定され、「見方・考え方」を働かせた学びを実現するための手立てを工夫し、指導と評価の一体化を目指して実践を行った。保健体育科の資質・能力を見取る評価の在り方について吟味し、教科横断的な視点に立った教育課程の編成に取り組んだ。

このように保健体育科での「学び」に対する姿勢が、授業などだけでなく日常生活にも発展し、生きる力となって発揮されることがこれからの社会で求められる力であり、保健体育科が目指す生徒の姿である。授業を通して身に付けた学び方や態度、高まった力を学校生活や実社会で発揮できる生徒の育成を目指すことこそが、新学

習指導要領の方向性とも合致する。そこで今年度の研究主題を「主体的に学び、獲得した力を発揮することができる体育学習の創造」と設定した。

## (2) 本校の生徒の実態

意欲的に学習に取り組み、与えられた話し合い活動や課題に取り組む中で、授業者が求めているものは何かを考えた発言や記述が多く見られることは、保健体育の授業だけに限られたことではない。自分の意見は主張するが、他者の意見を聞いたり参考にしたりしようと話し合いに取り組もうとする生徒はおよそ半分程度である。課題を見つけたり、解決しようと意見を出したり、仲間の考えを聞こうとしたりする生徒よりも授業者に与えられた場面設定に頼っている生徒が多数存在するのが現状である。自分なりの視点をもって授業に取り組み、課題の解決に向けた学習のプロセスが確立できていないことが課題である。

## 2 研究の方向性

### (1) 教科研究について（全体研究との関わり）

今年度からの2年間の全体研究主題は、「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～」である。令和3年度から完全実施される新学習指導要領には「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。」と述べられている。

保健体育の授業では、「主体的に学び、協働・対話を通じて多角的に考え、学習内容を理解しながらよりよい解決に向かう学習活動を実践していくこと」が求められる。「生きて働く『知識・技能』」とは、授業で学んできた知識や学習した経験を活用しながら課題の解決に向けて実践することであり、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』」とは、学習課程の中にある課題を見だし、何が必要かを考え、判断し、周りの仲間と協力するために伝え合っているながら解決に向かうことだと考え、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」については、授業で実践する改題解決だけでなく学校生活全般や仲間とのより良い関係を築いていくために発揮される力や態度であると考えます。

見いだされた課題を一人で解決することは難しく、仲間との関わりや学び合いなどの協働活動を通して、よりよい解決に向かう課程の中には、もっている知識や経験などを活用し新たな見方や価値などを「創造」できる力が必要不可欠であり、それこそが「生きる力」であると捉える。その「生きる力」を教科の中で系統的、計画的に育成することを目標に、保健体育科が目指す生徒像を設定した。

### (2) 保健体育科の目指す生徒像

保健体育科の研究主題に沿った目指す生徒像を設定した。この目指す生徒像の先には、生徒が生涯にわたって健康の保持増進に努めるために豊かなスポーツライフを実現することができ、身に付け高めた資質・能力を発揮し、仲間と協力しながら新たな課題にもよりよく解決するために実践できるものだと考える。

#### 保健体育科として目指す生徒像

- 自分の課題を見だし、よりよい解決に向けて主体的に取り組める生徒
- 仲間と協働し、高め合うことができる生徒
- 課題解決に向けた取り組みで培った力を生活の中でも発揮できる生徒

### 3 研究2年目について

#### (1)「主体的な学び」と実現するための手立てについて（研究1年目の振り返り）

授業のねらいや着目する視点についての設定を生徒に明確に示すことで、生徒は授業の中で何をどのように学ぶのか、何を目指して練習したり取り組んだりするのかをイメージし、主体的に活動に臨むことができた。評価する場面を明確にし、評価指標を作成することで、学習シートや観察での見取りをスムーズに行うことができたことが成果である。しかし、授業中に行う観察での評価の見取りについては、いくつものグループが同時に行われている様子を授業者が一人で見て回る状況から、更なる工夫が必要である。主体的に取り組む態度を評価できるような学習カードの工夫と観察の両方を取り入れた評価方法を模索することが求められる。スキルアップ講座で実施した長距離走の授業では、周回タイムやラップタイムの計測が簡易化できるようなICTの活用（アプリなどを活用し、活動時間を確保）、生徒のエンゲージメントが高められた姿や内面で繰り広げられている学びそのものを把握する手立て（どのように授業の中でその場面を表出させるか）を研究することが課題となった。

#### (2)今年度の研究の方向性

授業や単元計画のどの場面で生徒の「主体的な学び」が表出されるのか、またその生徒の「主体的な学び」を具体的な姿をもとにどのように評価していくのか、保健体育科が考える「主体的な学び」とは何かについて研究を深めていく。全体研究で示されている「主体的な学び」のプロセスモデルを単元構成や授業づくりに活用し、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組みを活かしながら評価規準、評価場面を設定して指導と評価のあり方について研究を進めていく。運動や体育が嫌いであったり苦手であったりしても、自分自身の体力の向上や健康の保持増進を意識でき、「体や心が育まれ、鍛えられ、成長している」ことが実感できるような保健体育の授業を目指したい。

### 4 研究の目的

生徒が、予測困難な状況下に直面した時に諦めることなく、既存の知識や経験をもとに自ら粘り強く思考し、よりよい解決方法を模索し、仲間と吟味し合っただけで出たアイデアを試し、振り返るサイクルを実践することで解決に近づける力を身に付け、打開（レジリエンス）し、新たな価値を創り出すことができる生徒の育成を目指す。

### 5 研究の内容

- (1)「主体的な学び」を実現するための手立て（「主体的な学び」のプロセスモデルの作成）と実践計画
- (2)「主体的に学習に取り組む態度」の評価
- (3)獲得した力を発揮できる機会の設定と評価

### 6 研究の具体的な内容

#### ア 「主体的な学び」への手立て

「見通し」「学習活動」「振り返り」を生徒がイメージできる単元計画及び授業計画、学習過程を作成し、ガイダンスを行う。また、保健体育の授業や他の教科とも連携し身に付けた資質・能力が、日常生活でも活用されることのできるような年間指導計画の作成・実施・改善（PDCA サイクル）

#### イ 「主体的な学び」のプロセスモデルの作成

生徒が運動の楽しさを実感できる授業の工夫。課題解決に向けて仲間と協力しながら行う協働的な取り組み。課題解決に向けて試行錯誤を重ね、没頭しながら取り組むことのできる課題設定。

## ウ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法と基準作成

学習カードの記述，仲間との協働的な学習場面における観察，ICT 機器を活用し，生徒の表現活動の記録や成果物の分析，授業への取り組む姿勢や態度などを活用した評価方法や評価規準の作成。

### 7 参考・引用文献

- 岩田 靖 体育科教育，大修館書店 「教具・遊具」の工夫と開発 2014年 4月
- 大後戸 一樹 体育科教育，大修館書店 子供を揺さぶる発問 2012年 12月
- 奈須 正裕 体育科教育，大修館書店 知識基盤社会における学習観の転換 2017年 4月
- 奈須 正裕 東洋館出版社 「見方・考え方」を軸とした授業改善 2017年
- 松尾 知明 学事出版「未来を拓く資質・能力と新しい教育課程 求められる学びの加減  
・マネジメント」 2016年 12月
- 堀 哲夫 東洋館出版社 「一枚ポートフォリオ評価OPPA」 2013年
- 文部科学省「中学校学習指導要領」 日本文教出版(2008)
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版(2008)
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版(2017)
- 山梨大学教育学部附属中学校 2018・19年3月 研究紀要